

耳納風土記 26

菊竹六鼓～不屈の意志を貫いた新聞記者～

●問合せ 生涯学習課文化財保護係 ☎ 75-3343



菊竹六鼓
(1880年1月25日-1937年7月21日)

うきは市にお住まいの方なら菊竹六鼓という名前を聞いたことがあるかもしれません。現在の西日本新聞社の前身、福岡日日新聞社の記者として時代の過渡期を生きた人物です。今回は、激動の時代を不屈の精神で生き抜いた菊竹六鼓について紹介します。

菊竹六鼓は、明治13年（1880）1月25日、代々旧家であった菊竹家7人兄弟の末子として延寿寺村に生まれました。本名は淳（うまお）といいます。2歳の時に骨髄炎を起こし、生涯歩行が困難な身となってしまう。しかし、六鼓は幼い頃から非凡な才能を発揮します。明善中学校（現明善高等学校）在学中には校内雑誌の編集と発行を任されるなど、言論人としての文才は早くから注目されていました。大学は東京専門学校（現早稲田大学）を優秀な成績で卒業し、帰京後に福岡日日新聞へ入社したのです。

当時の日本社会は文明開化から間もない頃で、日本は西洋の技術や文化を盛んに取り入れていました。また、世界中が戦争に明け暮れた時期でもありません。度重なる戦争を経験した人々の間には、国民が主体となって社会を動かす考

え方が広まります。いわゆる大正デモクラシーです。六鼓も、多くの国民が貧困にあえぎ、女性が身売りする状況を嘆き、公娼廃止や女性の権利を訴え、自由と人権への信念を持ち続けました。しかし、当時の国民は政治に限界を感じ、革新的な意見を唱える軍部に賛同する声次第が増え、悲惨な戦争へと再び突入していったのです。

以上、時代背景を紹介しましたが、そのような中で起きたのが五・一五事件であり、菊竹六鼓を語る上で無くてはならないエピソードです。昭和7年（1932）、当時の犬養毅首相が青年将校らに暗殺されました。この事件は言論の封殺であり、政党政治の終焉を告げるものでした。これ以降、日本は軍国主義に突っ走り、一気に太平洋戦争まで突入していくこととなります。この事件に対しては、全国の新聞社が、報復を恐れて記事することを避ける中、唯一六鼓だけは軍部の責任を追及し続け、民主主義の在り方を示しました。この時、福岡日日新聞の本社、久留米支社ともに脅迫と抗議が相次いで起こりましたが、六鼓と新聞社は屈すること無く立ち向かいました。

また、五・一五事件より前になりますが、六鼓の考え方が良く表れているエピソードを紹介します。明治38年（1905）、福岡市近郊で踏切事故が起きます。踏切信号手の11歳の娘が、4つの信号を守っていたとき、汽車の接近に気づかなかった歩行者を助けようと、身代わりとなり亡くなってしまいました。当時は日露戦争の最中で、世論は戦

争一色でしたが、六鼓はあえて無名の少女の死を取り上げました。このことが、六鼓の記者としての知名度を上げることになりました。

以上の2つのエピソードからは、六鼓の反骨性や精神性が見て取れますが、最後に六鼓の知られざる家庭での側面について紹介します。六鼓の妻は静子といい、明治時代には珍しい恋愛結婚であったようです。静子の叔父は結婚に強く反対しますが、六鼓に似て芯の通った女性らしく、確固たる意思で結婚まで至ります。また、六鼓が左遷され弱っているときには「私が養う」と言うほど肝のすわった賢く強い女性だったことが分かります。また六鼓は子煩悩でもあったらしく、長女結婚の際は、家の柱が一本無くなったと嘆き、末娘が小学校に入学したときは、登校する娘の姿が見えなくなるとまで見送るなどのエピソードが残っています。強大な軍部に毅然と立ち向かうなど、新聞記者としては「古武士」と例えられた六鼓ですが、家庭では一人の夫として妻に助けられ、良き父として子供たちに接していた微笑ましい姿も浮かんできます。

晩年は、結核にかかり、昭和12年（1937）7月21日、日本がまさに泥沼の戦争に突入した直後、57歳で、家族に看取られながらその生涯を終えます。息を引き取る直前、新聞社の面々を招き、新聞社の将来について意思を告げました。この六鼓の新聞記者としての姿は世界でも高く評価され、「20世紀の報道陣100人」（世界新聞協会）に選ばれました。